

## ビルマ戦線における英国の戦術指揮とリーダーシップ - 1941 ~ 45 年 -

グラハム・ダンロップ

ウィリー・ゴーシェン准将とヘッダーウィック中佐は今、コヒマの英連邦戦没者墓地に並んで眠っている。このあたりには戦前、副弁務官の官舎正面の庭園があった。ビルマ作戦における英軍の戦術指揮とリーダーシップを考えるうえで彼らの墓の周辺の状況から記述し始めるのは意味のあることだと思う。ゴーシェンは1944年5月の戦死時に、コヒマから日本軍を駆逐する困難な戦いに従事していた英国第2師団の旅団長であった。同師団は機械化、砲兵、機甲部隊、空軍力で勝っていたが、巧妙に配備された頑強な守備隊と戦闘になり困難に見舞われていた。ゴーシェンは旅団を率いて、バルバドズ山の麓のコヒマ高地の側面に陣取る日本軍を攻撃するため、山系を通過して側面を包囲する行動に出た。同旅団は当初、若干の成功を収めたが、強力な日本軍により阻止され、膠着状態に陥る恐れがあった。

ヘッダーウィックは27才のインド人士官であり、先頃のアラカンの戦闘後、コヒマに投入された第7インド師団のグルカ大隊を指揮していた。そこで師団が包囲され、空からの物資補給を受けて17日間、陣地を守備した。この戦闘の間に、師団長のメッサビー少将は司令部を日本軍に包囲され、日本軍の包囲網を突破して師団に戻る破目となった。

ヘッダーウィックの大隊はコヒマ高地に対する攻撃を増援するため、ゴーシェンの旅団の陣地を通過して前方へ進出した。ゴーシェンと英国ノーフォーク連隊の第2大隊の指揮官であるロバートスコット中佐は、ノーフォーク連隊の第一線の塹壕からこの様子を見守っていた。ヘッダーウィックの先頭中隊は苦境に陥り、将校が全員戦死したため、次の攻撃は自分が指揮して行うことを決めた。彼は前進中に撃たれ、ゴーシェン付き看護兵が前に出てヘッダーウィックを連れ戻そうとしたが狙撃された。このためゴーシェンがヘッダーウィックを救出しようとして狙撃された。最後に大男のスコットが進み出てゴーシェンを引き入れたが、彼はスコットの腕のなかで死亡した。ゴーシェンの後任、テオバルド准将は3日後にコヒマ高地の別の攻撃で戦死した<sup>1</sup>。

デレック・フォースフォード少佐（当時27才）がヘッダーウィック戦死後、グルカ兵の指揮をとった。彼はこの戦いの後半に、戦場の他の正面にあるナガ村の掃討を命令された。ここにはコヒマを守備する日本軍の最後の大隊があり、強固な守りを固めて正

---

<sup>1</sup> Arthur Swinson, *The Battle Of Kohima* (Cassel, 1996), pp. 180-181.

面攻撃に抵抗し、英軍に多数の死傷者が出た。フォースフォードはナガ村占領の試みについて、後日、次のように語った<sup>2</sup>。

われわれの旅団長は驚くべき人物であり、皆が尊敬していた。彼は第1次大戦の勇士であり、どのような状況にも、「着剣、弾込め」で対処した。これは日本軍にとって致命的だった。

フォースフォードはもっときめ細かい手法を用いた。慎重な偵察、良好な計画、優れた陣頭指揮により、グルカ兵が夜間にジャングルを通して浸透する日本軍の技法を用いて日本軍の陣地を側面包囲することができた。グルカ兵がそこに陣地を構築し、戦車で増強されるに至って日本軍は陣地を守備できなくなった<sup>3</sup>。

このエピソードを語るの、これがジャングル戦の特徴となる戦術指揮とリーダーシップの多くの重要な側面を示しているからである。それは第1に指揮官はどの程度まで前方に赴くべきかを物語っている。大隊長、旅団長、師団長は常に前線にいて時にはそれよりもさらに前進した。このため士官の多くが死傷し、インド兵、アフリカ兵を指揮する英国人将校の犠牲が多く見られ、接近戦での死亡が目立った。コヒマでは4名の旅団長が負傷し、うち2名が戦死した。第2に戦術単位部隊の指揮官の多くに若さがみられた。戦場の環境と状況が彼等に非常に多くのことを要求したし、彼等はこれに順応して取り組まなければならなかった。第3に英軍指揮官は浸透戦術を学ぶ必要があったが、これは容易なことではなかった。

以上は問題点を略述したに過ぎず、さらに考察を掘り下げねばならない。戦術レベルの指揮の成否は戦場での兵器、装備、人員の使用と維持の方法、そして敵を打破するための軍隊の士気の保ち方に依る。私はビルマ作戦における英軍組織の戦術レベルの指揮というものを下は末端の小隊から上は軍団に至るまでの指揮と定義する。(したがって)第14軍とその前身である東部軍は作戦レベルで行動したことになる。戦術レベルの指揮が奏効するためには、良好な戦術的思考と良好な管理、良好なリーダーシップが要求され、この3つの要素は不可分であり等しく重要である。指導者は戦場での部下の管理と扱いが悪かったり、誤った指揮をすれば、いかにカリスマ的であっても、部下の士気を鼓舞できない。リーダーシップの質を考えるにあたっては戦術的思考と管理能力とを切り離

---

<sup>2</sup> Major General DGT Horsford CBE DSO から筆者への手紙(2002年6月11日付)。

<sup>3</sup> Swinson, *The Battle of Kohima*, pp. 223-229; S Woodburn Kirby, (ed.), *History Of The Second World War – The War Against Japan Volume III* (Her Majesty Stationary Office, 1961), p. 352; Bisheshwar Prasad, (ed.), *Indian Armed Forces In World War II- Reconquest Of Burma Volumn I* (Combined Inter-Services Historical Section (India and Pakistan), 1958), p. 298.

すことはできない。本稿での筆者のねらいは戦術レベルの指揮でこれらすべての指揮の要素を英軍がどう扱うかを考察することである。

本稿では随時、人名に触れることはあるが、特定の個人に焦点を合わせることは避ける。英軍が戦争の展開に伴ない、戦術レベルで直面する指揮上の主要問題とどのように取り組んだかを広い視野から考察する。戦闘の物語は詳述せず、年代順に検討を進める。

1941 年末、最初の戦火が開かれた時、ビルマは訓練された経験豊かな敵と戦う準備が全くできていなかった。駐留していた 1 個師団は主に国内治安と儀式のため訓練を受けており、現地徴兵が多かった。機甲部隊はなく、兵器は乏しかった。ジャングル戦の基礎知識は備えていたが、そのための訓練はほとんど受けておらず、集約的な戦闘の訓練は全く行われていなかった。ビルマ守備隊の指揮と維持の責務はデリーのインド司令部、シンガポールの極東司令部、そして開戦時にオランダ領東インドに組織された米国、英国、オランダ、豪州の混成部隊との間で入り組んでいた。日本軍がビルマに進攻した頃、後方のインド司令部が対処することになった<sup>4</sup>。このため戦闘の準備段階でビルマにおける作戦・戦術問題の指導に混乱や監督不足があった。日本軍の能力や意図に関する正確な情報がなく、戦争以前から日本兵の質を過小評価する傾向があった。

土壇場で一部の大隊長が戦術とジャングル戦の訓練を若干実施したが、装備、兵器、人員が乏しかった。グローセスター連隊の第 1 大隊はその一例である。同連隊はビルマ南部の日本軍を迎撃するための当初の展開には参加せず、ラングーンでの任務を維持していた。大隊の士官の多くは、戦闘要員が不足していたビルマ陸軍司令部に転属していた。しかし、土壇場になって、指揮官のバゴット中佐が鉄条網などの便宜的手段を利用して若干の防御訓練を何とか組織化した。機関銃や迫撃砲は僅少で、対戦車砲はなかった<sup>5</sup>。

1942 年 1 月、ビルマ守備隊は第 17 インド師団により補強された。対日戦が始まった時、中東で移動作戦の訓練を始めたばかりの師団である。その下級士官、下士官、経験ある兵士は中東に赴く部隊に転属しており、良好な下級指揮官が不足していた。同師団は、ビルマに展開する前、第一級の敵に向かう作戦行動には不適當であるとされていた。その後、2 個旅団がマレーの補強に転属し、全く訓練を受けていない師団により置き換えられた。戦闘部隊としては骨抜きにされたに等しく、1942 年 2 月 22 日にシッタング橋が破壊された時、この部隊は河の前方に取り残された。病床にあったその指揮官ジョン・スミス少将は解任された。同師団は 3 月に新指揮官の「パンチ」コーワン少将の下で再編成された。それ以前の任務で作戦行動に不適當とされた人物だが、同師団は以後、

<sup>4</sup> Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume II*, chap. 1.

<sup>5</sup> Michael Hickey, *The Unforgettable Army* (Spellmount, 1992), pp. 26-27.

終戦まで彼の下で目覚ましい活躍をした<sup>6</sup>。

開戦初期に一筋の光明となったのは、(アフリカ戦場の)砂漠でインド兵とドイツ兵との戦闘経験を有し、完全充足で、装備、指揮系統に優れた第7機甲旅団の到着であった。同旅団はビルマ部隊のインドへの撤退を成功に導く上で中心的な役割を果たした。

英軍司令部は、移動と守備のための道路網が貧困なことや、最初の数週間が過ぎてからは空軍の援護がなくなったため、ジャングルから浸透し、後方連絡線を遮断して側面包囲する日本軍の攻勢戦術に対処できなかった。日本軍が攻勢に出るたびに、英軍は道路の障害を啓開し、時には重装備を放棄して撤退した。この日本軍の戦術はマレー戦線でもビルマ戦線でも終始有効であった<sup>7</sup>。

この戦術上の失敗にもかかわらず、最初の戦闘では、英軍の指揮に少数の重要な成功例がみられた。第1に第17師団がシタング橋の破壊後に再編された速度である。同師団は1942年3月初旬までに新司令官の下で復活し、戦力は低下したが、インドに到達するまで、作戦を継続した。第2に、ビルマ兵の脱走と敗北にもかかわらず、英国人、インド人戦闘部隊の士気は全般的に維持された<sup>8</sup>。ビルマ総督のデジナルド・ドーマン・スミス卿はビルマ撤退後の公式文書に次のように記載している<sup>9</sup>。

やる気と勇気だけで日本軍を食い止められるなら、ビルマは今日でもわれわれのものであつたろう。

第3に、兵站部門の参謀はラングーンが陥落した場合に守備隊を維持するため、ビルマ北部に十分なストックを貯えていた。

その結果と第7機甲旅団の戦術的效果によって、1942年3月にスリム中將の下に第1ビルマ師団および第17インド師団から編成されたビルマ軍団は1400キロにわたり敵と接触しつつ撤退するという最も困難な作戦行動を遂行できた。多大の損害と装備の放棄にもかかわらず、同部隊は強靱な戦力を維持した。空軍の支援や主補給基地への退却なしでこれを達成したことは、英軍全般の士気が低下するなかで示された質の高い戦術指揮のおかげであった。スリムと彼の部下である2人の師団長、コーワン少将とスコット

---

<sup>6</sup> Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume II*, appendix 2  
Sir John Smyth, *Milestones-A Memoir* (Sidgwick and Jackson, 1979), pp. 152-154.  
Hickey, *The Unforgettable Army*, pp. 55, 62.

<sup>7</sup> Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume II*, pp. 218-220.  
Ian Iyall Grant and Kazuo Tamayama, *Burma 1942-The Japanese Invasion* (Zampi, 1999), chap. 25.

Viscount Slim, *Defeat Into Victory* (Cassel, 1956), pp. 119-121.

<sup>8</sup> Slim, *Defeat Into Victory* (Cassel, 1956), p. 109.

<sup>9</sup> "Burma Operations 1942-1949, Report by Sir Reginald Dorman-Smith, Governor of Burma, on the Burma Campaign 1942," (British Library, London, India Office Collection [hereafter BLIOC], L/WS/706).

少将が旧インド軍の同僚であり友人であって相互に理解し、信頼しあったことが役立った。

ビルマ軍団がインパールに到着した時、インド東部軍がこれを冷遇したことは、第1次ビルマ作戦の汚点であった。管理や宿舍の用意ができておらず、到着した部隊は自ら手配する以外に途がない有様であった。長期の退却に加え、雨期の期間中を通じてインパールを守備する見通しとなったことが、士気を維持するうえでリーダーシップの困難を増幅した。それは管理部門の悲しむべき失敗であり、指揮官と責任ある参謀達による同部隊への基本的な人間的配慮の欠如を示していた<sup>10</sup>。

1942年5月の第1次ビルマ作戦終了に当たり、英軍司令部では戦術レベルでいくつかの大問題を解決しない限り日本軍に立ち向かえないことが明らかとなった。第1にジャングルに生き、移動し、戦闘を行なうことができるようジャングル戦術を習得しなければならなかった。将兵はもっと強靱かつ健康になる必要があった。共通のドクトリンと戦闘訓練を開発し、これを普及させ、教育しなければならなかった。潜伏、戦闘における火力と機動の統制、病気予防などはもっと厳しい鍛錬が必要であった。誰もが（ジャングル内を迷わず）通過できなければならなかった。部隊は機械力を用いずに、路外（ジャングル）を動物による運搬と空からの補給を受けながら独力で作戦することを学ぶ必要があった。戦闘部門と、管理部門の両部隊の誰もが、自衛のためだけでも効果的に戦えるようにしなければならなかった。あらゆるレベルの司令部に個人と部隊に対する適切な訓練を開発することが求められた。

第2に、これは第1の点と密接に関連するが、英軍は日本軍の浸透と側面包囲戦術への対抗策を策定する必要があった。この面で英軍は第1次ビルマ作戦を通して失敗している。この種の戦術は戦争の歴史上目新しいものではないので、英軍は驚くべきではなかった。第2次大戦初期の英軍の敗北はジャングルを嫌い、補給のための道路の遮断を恐れたことが大きく響いた。ビルマ軍司令官を兼任するアレキサンダー将軍は、インドへの撤退後の報告書に次のように述べている<sup>11</sup>。

正しい防衛方法は補給物資と弾薬のストックを貯え、輸送の拠点と通路を確保し、その背後に機動力ある戦力を保持し、敵が包囲を試みた場合に反撃できるようにすることだと確信している。

これらの戦術は縦深に機動予備を有する十分な部隊を必要とするが最初のビルマ作

<sup>10</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 111-112.

<sup>11</sup> "Supplement to the London Gazette, 11 March 1948." (1942年7月14日付のウェーベル将軍の指令書に付されたアレキサンダー将軍の付紙。

戦では英軍にそれがなかった。加えて、包囲されることへの恐れを克服し英軍は道路へ依存することから離れねばならなかった。これは、第3の決定的要因、すなわち士気に関連してくる。

東南アジアにおける士気の維持はこの地域に特有な多くの問題を抱えている。それは戦争の全体を通じて指揮官の課題となったが、戦闘の初期段階で顕在化した。環境は特に厳しく、乾燥した準砂漠から世界一雨量の多いジャングルで覆われた山系におよび、多くの危険な伝染病がこれに加わる。特にジャングルは多くの兵士にとって未知のものであり、脅威であった。彼らは戦争の当初にそのための訓練を受けていなかった。連合軍は種々異なる文化と国籍の兵士により構成されていた。相互に馴染みがなく、食事、祭礼、習慣などが違っていたが、全員が相互に依存し、戦闘組織として団結していなければならなかった。連合軍にとってビルマは副次的な戦場であり、戦争の優先順位が低かった。このため装備の到着が遅れ、故郷の家族は現実を知らず、兵士は忘れ去られた気持ちになった。英国社会の発展とインドの民族主義運動が何のために戦争しているのかとの疑問を生じさせる温床となった。兵士は家族の状態を憂いた。その上、敵は情容赦のない無敵の存在との定評があった<sup>12</sup>。

雨期とビルマから撤退した部隊への冷遇にもかかわらず、インパールの第4軍団の前線にはこれらの問題と取り組む勢力的な指揮活動がみられた。コーワン大將は第17師団に次の行動を即時準備させるため緊急措置をとった。彼は第1次ビルマ作戦から学んだ教訓に関する詳細な報告書を作成した。キャメロン・レポート（作成者キャメロン准将の名に因む）<sup>13</sup>と呼ばれるこの報告書はジャングル、戦術そして兵器の訓練や、若手将校および兵士を鍛える演習の必要性を示している<sup>14</sup>。キャメロンは、側面包囲と英軍の補給線遮断という日本の戦術への対応策については、アレキサンダーと同じ結論を下したが、十分な兵力が利用可能となり、ドクトリン、訓練、士気、物資補給方法が適切に確立するまで苦戦を強いられた。この集中訓練と並行して、1942年の雨期季を通じてチンドウイン河とマニプール高地で作戦が継続されたことで日本軍と接触が保持され、情報活動が進化し、ジャングル戦術が習得され、部隊に自信が醸成された<sup>15</sup>。

ベンガルを拠点とし、アラカン戦線を担当していた第15軍団は1942年に移動し、「クイットインディア（インドを去れ）」運動の間に国内の治安維持に当たった。このため訓練に支障を来し、英国の統治への反抗に直面したインド兵の間に信頼への疑念が生じ

---

<sup>12</sup> この問題についてのスリムの考え方については Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 182-196 を参照。

<sup>13</sup> “17th Indian Division Report -Lessons from the Burma Campaign 1942 [the Cameron Report],” (Public Record Office London, War Office Paper [hereafter PRO WO] 203/5716).

<sup>14</sup> “17th Indian Division G Staff War Diary, Training Instruction No.1, 4 June 1942,” (PRO WO172/475).

<sup>15</sup> Prasad, *Reconquest Of Burma Volume I*, chaps. 3, 4.

た。小規模で高度に専門的なインド軍は多くが中東とマレーに展開しており、補強のため急速な拡大をする最中であった。その新規採用には政治的な懸念があり、日本がマレーで捕虜にしたインド兵を使って英国の統治を排撃するためマレーにインド国民軍を編成したことで事態が悪化した。インド軍の英国人指導部は信頼感の面で大きな打撃を受け、マレー、ビルマ、中東で敗北した。インド国民軍への参加者の多くは、英国人の指揮官に見下されたと印象を受けたことが鞍替えの理由となったのである。

この時期に多くのインド大隊と英本土大隊が警察を支援して治安を維持し、民族主義の反乱分子から要所を守備するため動員されており、インド兵は大きな社会的、政治的圧力を受けた。しかしインド軍自体は大部分が政治と無関係で英国の指揮に忠実だった。これは主に連隊の風土、インド人士官および兵士固有の忠誠心、勝利のあとに独立が訪れた時には適切に機能する軍隊が安定に不可欠との認識によるものだった<sup>16</sup>。

しかし、戦争準備は分離運動の影響を受け、1942～43年の冬におけるアラカン海岸の英国の攻勢は、計画設定、訓練、戦術、リーダーシップの不備が原因で敗北し、士気の崩壊につながった。アキャブ正面には、陸海空軍連携した上陸作戦が計画されたが、上陸用舟艇が充当されず、か細く不適切な後方連絡線を抱えた正面攻撃にもどってしまった。戦闘隊形や各隊の指揮官も含めて、第1次ビルマ作戦の経験を活かしておらず、その作戦の教訓も見逃されるか無視された。すなわち依然としてジャングルでの技量が不足し、英軍士官の多くがいまだ道路を保持することに依存しすぎた<sup>17</sup>。英軍の進撃は鈍重であり補給路を建設することに拘束された。それで、日本軍は英軍の動きを捕捉して兵力を増強し、反撃を加えることができた。英軍はラテドンとファウル岬では重要な陣地が占領されていないことを発見したが、日本軍が到着する前にこれを確保する機会を逸し、イニシアティブを失った。その後、英軍の攻撃戦術は、日本軍の浸透と側面包囲の前例を軽視し、多大の犠牲を払って敗退した。ラテドンとドンベイクに急速に構築された日本軍の陣地に繰り返し行なわれた攻撃が撃退された後、英国人とインド人の部隊が戦闘継続を拒否したとの報告があった。ジャングルでは戦車・装甲車を使用できるというマレーとビルマの教訓にもかかわらず、その出動はただの1度に止まった。それも歩兵との調整が悪く、直ちに撃退された。日本軍はジャングルでは依然、英軍より優勢であり、英軍は補給線を断たれて撤退を余儀なくされた。英国人部隊とインド人部隊はジャングルでの日本兵に恐怖感を抱き、部下に逃げ出された将校の例も報告されている。

作戦のための指揮協定に欠陥があった。攻撃に任じたロイド少将の第14インド師団

<sup>16</sup> BL IOC L/WS/1/707, Indian Army Morale and Possible Reduction, Minute for the War Cabinet Chiefs of Staff Committee, 10 May 1943, covering a Paper by the Secretary of State for India, 3 May 1943; Peter Mason, *A Matter Of Honour* (Purnell, 1974), chaps. 18-20; S P Cohen, *The Indian Army* (Oxford, Delhi, 1990), chaps. 4-6.

<sup>17</sup> Hickey, *The Unforgettable Army*, p. 75.

は東部軍の直轄で攻撃を開始した。東部軍司令官はアーウィン将軍であり、彼は前に第4軍団の軍団長であったが1942年5月ビルマ軍団の受け入れに不都合があった責任者でもあった。スリムの第15軍団司令部は、この作戦を円滑に指揮できる装備を有しており、軍と師団間を適切に接続することができたが、この指揮関係から外れていた。このため第14師団は益々多くの旅団を取り込み、前線強化に投入し、仕舞には1名の指揮官とスタッフでは管理できなくなった。この段階でアーウィンが進み出て同師団の指揮を個人的に直接行なうに至ったことが事態を悪化させた。作戦が失敗だったことが判明すると、アーウィンは後退し、遂にローマクス少将麾下のインド師団を前線に送り込み、スリムの第15軍団司令部が戦術の指揮をとった。これが整然とした撤退の実現に間に合った。それでも管理部門の指揮は東部軍が維持した。第15軍団には戦術指揮だけが委ねられたのである。この不要な機能分離は致命的な結果をもたらす恐れがあった。英軍はコックスバザールの前進開始地点まで後退し、43年の雨期到来を避けることができたが、撤退を成功させるためにはスリムとローマクスの巧みな戦術手腕とリーダーシップが必要だった<sup>18</sup>。第14師団は訓練任務に転じ、二度と前線に復帰しなかった。アーウィンは更迭された。

作戦の後半に状況を把握したスリムは、包囲されている友軍が陣地を保持して戦っている間に機動力のある予備隊で敵の包囲環を攻撃することで、日本軍の包囲戦術を打破することの重要性を繰り返し主張した。これはアレキサンダーとキャメロンが以前に策定した戦術である<sup>19</sup>。しかし、必要な資源、訓練、強力なリーダーシップが欠けていることは明白だった。先に明記したジャングル戦の訓練、守備、そして士気の問題に加えて、有利な位置を占め堅固に構築され守備されている日本軍の陣地をどのようにして撃破するかという新たな問題が生じた。砲撃と爆撃では破壊できず、戦車・装甲車なしの歩兵の正面攻撃は多数の死傷者と士気低下を理由に退けられた。日本軍の浸透、側面攻撃、補給線遮断と背後からの攻撃を採用するのは一つの解決策だが、これは道路への依存を捨て、ジャングル戦の練達と自信を大きく改善しなければならない。これらの手法を用いられない場合、英軍は歩兵、砲兵隊、機甲部隊、空軍の活動を調整、決定的に重要な時機と場所に圧倒的な火力を集中するため、より優れた諸兵種連合戦術を開発しなければならなかった。英軍指揮官が歩兵との緊密な協力を得ながらジャングルでの戦車・装甲車の使用方法を学べば、ジャングル戦に対処できた。

一方、アラカンの大敗後、英国人、インド人の士気と、英国の対日戦争能力に対する

---

<sup>18</sup> Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume II*, chaps. 15, 19, 20; Slim, *Defeat Into Victory*, chap. 8.

<sup>19</sup> PRO WO 172/1838, XV Corps GS War Diary 1943, Appreciation by Commander XV Corps, 26 April 1943.

同盟国の信頼感は空前の低水準に陥り、兵士と指揮官の間に不信が広がった<sup>20</sup>。これは指揮官の完全な失敗であり、チャーチル首相は次のように書いた<sup>21</sup>。

ビルマにおけるこの作戦は悪化の一途をたどった。日本軍は戦闘、策略ともにすぐれていた。幸い、作戦の規模が小さく、別な事柄に注意がひかれたため、この嘆かわしい戦場は世論の批判を免れた。

別な事柄の一つは、1943年にウインゲート准将が第1次チンデット遠征から帰還したことである。彼の第77旅団は、インダウ付近の日本の輸送路を切断し、多くの日本部隊の予先をかわした<sup>22</sup>。

第77旅団は、大きな戦いは行なわなかったが、主に病気により多数の死傷者をだし、帰還したのは3分の2に過ぎなかった。しかし、この遠征は士気の勝利を収めたと評価され、アラカン攻撃の失敗を覆い隠し、英国人兵とインド人兵は信頼関係を徐々に回復し、ジャングルで日本軍に勝てるとの確信を持つに至った。同旅団は特別に選ばれた兵士により構成されたわけではない。キングズ・リバプール連隊の英国人大隊は守備と治安維持にのみに適した第2級の歩兵と考えられていた。だが、適切な訓練と指導の下に、補給を全面的に空軍に頼りながら、日本軍の戦線の後方を1600キロにわたり道を開きながら行進した。英軍にとってこの遠征は、多くの面で道路のないジャングルの中の戦闘の経験となった。それは平時には目立たないが、戦時に頭角を現す冒険心に富んだ一匹狼的な指導者によるところが大きい。彼等自らは戦争の勝利者ではなく、ウインゲートを野蛮な行動で優秀な兵士を死なした厄介者とみなす向きもある。しかし、敗北して弱体化した軍を戦場で勝利するよう大きく変身させる先駆的な戦術と士気は、このような指導者によってもたらされることが多い。彼はチンデットの指揮官として真の天才であった<sup>23</sup>。

1943年の残りの期間に、すでに述べた問題のうち幾つかが存続し、新規の問題が発生したとはいえ、英軍司令部の管理と戦術の考え方が著しい改善を示し始めた。1943年10月、訓練と一般管理面でのインド司令部の支援の下に連合軍東アジア司令部と第14軍が形成され、戦術および作戦レベルでの指揮能力が著しい質的向上をみせた。これに

<sup>20</sup> Louis Allen, *Burma, The Longest War* (J M Dent, 1984), pp. 91-116.

<sup>21</sup> Minute from Churchill to General Ismay for the Chiefs of Staff Committee, 8 April 1943, in Sir Winston Churchill, *The Second World War Volume IV – The Hinge Of Fate* (Cassell, 1951), p.841.

<sup>22</sup> Imperial War Museum, London [hereafter IWM], Japanese AL Box 9-5030, Report by Lieutenant General Mutaguchi Renya and Lieutenant Colonel Fujiwara Iwaichi – The Effect on the Japanese Army of the Wingate Invasion of Spring 1943.

<sup>23</sup> Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume II*, pp. 327-329; Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 162-163.

より作り出されたエネルギーは急速に戦術レベルに浸透した<sup>24</sup>。この頃から第14軍内部の訓練構成指令は、部隊訓練の強化、隠蔽、射撃規律、パトロール、浸透攻撃要領、諸兵種連合戦術などに力点が置かれた<sup>25</sup>。この指令書は東南アジア司令部で蓄積された実戦経験とインド司令部の訓練スタッフの健全な発想との交流を表わしている。

インパール戦線の第4軍団では、現地ジャングル訓練と、第17、20および23インド師団による大隊レベルまで日本軍との接触が継続され兵の練度と自信を改善した<sup>26</sup>。それにもかかわらず、依然として日本軍を打倒する方法の開発が待たれていた。例えば、第17師団の部隊は1943年12月、チン高地のフォートホワイトの攻撃で、山岳地形で機動の余地が制約されていたにもかかわらず、想像力に乏しい正面攻撃を行なったと米軍のオブザーバーから手厳しく批判された<sup>27</sup>。しかし、地形に有利な他の方面では、正面攻撃を避け、浸透戦術を用いて成果をあげ、日本軍を遮断して退却させた。1944年2月のカボウ谷地のキャウクチャウで行なわれた小規模の戦闘はその好例であった<sup>28</sup>。

1943年後半の報告書は訓練と敵との接触が士気に好影響を与えたことを示しているが、同年、英国軍、植民地軍、およびインド軍に採用される士官と兵の質に重要な問題が生じた。適切な兵士不足の深刻化は全戦場に響いた。例えば、インド軍は開戦当初の約19万人から1943年中頃には約200万人に増大した。前年に表面化した「クイットインド（インドから去れ）」運動の問題が再び浮上した。その上、インド軍はその頃までに通常の地域と階級から採用できる人員をすべて動員しており、軍事経験に乏しい地域に徴兵対象を拡大しつつあった。徴兵の状況は悪いケースが多かった。1943年7月、バイスロイはインド担当国務相に次のような電報を送った<sup>29</sup>。

徴兵の拡大に伴って基準が一般に低下し、新しい階級が含まれるため訓練期間の延長が必要なことは明白である。

新規徴兵者の食事と物的条件の監督に関し、特別の指示が全将校に与えられた<sup>30</sup>。

---

<sup>24</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, p. 536.

<sup>25</sup> Liddell-Hart Centre For Military Archives, King's College, London [hereafter LHCMA], Messervy papers 5/1-13, General Officer Commanding 7<sup>th</sup> Indian Division Operational Notes; National Army Museum, London [hereafter, NAM], Army in India Training Memorandum No. 24, March 1944. このテキストはメサービーの作戦ノートから直接引用したものである。

<sup>26</sup> Prasad, *Reconquest Of Burma Volume I*, chap. 10.

<sup>27</sup> PRO WO 203/2468, 17<sup>th</sup> Division Operations on the Tiddim Road, Report by the US Military Attache in India, 14 December 1943.

<sup>28</sup> PRO WO 203/682 and 203/684. これらの資料は1944年2月10日における第20師団のキャウクチャウの戦いを詳しく分析している。

<sup>29</sup> BL IOC L/WS/1/707, Indian Army Morale and Possible Reductions, Telegram from Viceroy to Secretary of State for India, 29 July 1943.

<sup>30</sup> NAM, Army in India Training Memorandum No. 23, December 1943.

1943 年 10 月、ジャングル戦の状況を検討するロンドンの戦時歩兵委員局は、より高度の兵器と勤務が要求される結果、歩兵部隊にはジャングル戦での重要任務に適さない兵士が残されたと述べている<sup>31</sup>。

上述の指揮上の問題は高級将校が取り組むべきであるが、この時までに新任の初級将校の水準について指揮官からの苦情が増えていた。小隊が高度に孤立したなかで行動する必要のあるジャングル戦では、初級将校に大きな信頼と責任を課せられており、インド人兵、アフリカ人兵の指揮が英国人士官にさらなる負担をかけた。テクニカルな能力と良好な管理を通じて兵士の信頼を得るためには、兵士の母国語で話さなければならず、部下の文化を理解し、それに関与しなければならない。伝統的にこれらの士官は慎重に選抜され、訓練でよい成績を収めた志願者であることを要する。彼等はインドやアフリカに長年駐在し職業的、社会的な団結心を培っていた。

特にインド軍はインド北西国境地帯で広範な作戦の訓練を受けており、このため第 2 次大戦の開始時に立派に任務を遂行したが、インド特有の文化は英本土軍により理解されない面もあった。インド軍が急速に拡大し、戦争初期の選抜と訓練が不適切であったことから、志願兵ではなく、文化を理解しない質の低い若手将校が多く任命される結果となった。部下の福利厚生に十分に配慮しない者が多く、インド部隊に加わって兵士と話ができない英国人士官が多かった。多数の下士官が士官の訓練を受けたが、準備と適性の不足について苦情を提起される者が多かった<sup>32</sup>。将校に任命されるインド人が増えてきた。部下との馴染みが深いインド人将校が新米の英国人将校に勝ったことは当然であったが、彼等の人数は少なかった<sup>33</sup>。

アフリカ人部隊に配属された一部英国人の質にも同様な懸念があった。さらなる問題として、指揮官は伝統的にすべて英国人将校またはノンキャリアの将校が任命されており、このことがアフリカ人のイニシアティブを失わせると考えられ、英国人指揮官が倒れた時に重大な結果を招く恐れがあった。これもアフリカ人植民地軍の急拡大によるものであり、アフリカ出身の将校の不足によるところが大きい<sup>34</sup>。

これらの問題と取り組む対策が 1944 年初めから効果を現してきた。その時までにインドで活動していた訓練師団である第 14 師団と第 39 師団は新兵と新部隊を現役の兵力として役立つよう激しいジャングル訓練を施した<sup>35</sup>。新しいインド陸軍士官学校が設立

<sup>31</sup> PRO WO 106/4708, Jungle Warfare Training, Report by the Infantry Committee MO12,11 October 1943.

<sup>32</sup> BL IOC L/WS/1/707, Indian Army Morale and Possible Reductions, Letter from the Chief of the General Staff (India) to the Chief of the Imperial General Staff, 9 September 1943; Minute for the War Cabinet Chiefs of staff Committee, 10 May 1943. BL IOC L/WS/1/939, Quarterly Reports of Adjutant General (India) Committee on Morale, Report No. 4 August – October 1943.

<sup>33</sup> Cohen, *The Indian Army*, p. 145.

<sup>34</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, p. 166.

<sup>35</sup> BL IOC L/WS/1/441, Liaison Letters from the Chief of the General Staff (India) to the Chief of

された。たとえ新任士官の質と訓練に問題があっても、彼等を部隊レベルでインド人部隊に組み入れるよう配慮された。これについてガズデン中尉は次のように述べている<sup>36</sup>。

バンガロー・ガリソンは若手士官にとって心地よい場所ではなかった。訓練を行なうインド人上級将校は宿舍とクラブで家族と過ごし、行きずりの「一時的紳士」に冷たかった。ガズデンは第 14 パンジャブ連隊の大隊に配属されて別世界を見た。第 1 に彼はインド人上官に会わなければならなかった。彼の上司はパンジャブのムスリマンであり、彼から部下の宗教的習慣を尊重することを学んだ。上司は若い英国人士官に部下と社会的に交流し合うよう励ました。これは英国人軍ではみられないことであった。ガズデンは 1 週間に数回、兵士と一緒にお茶を飲み、食事をした。若い兵隊達はこれに応え、ヒマラヤの麓で大隊の訓練が行なわれた時、キャンプファイヤーを囲んで歌をうたい、フォークダンスをした。数ヵ月の後、訓練が完了した。ガズデンは次のように書いている。「1、2 ヶ月で全員が忠実なパンジャブ人となり、翌年に大隊を戦場に率いた将校は、訓練期間中に士気を高揚した。」

その結果、東南アジア司令部とインド司令部は 1944 年初以降、これら地域の危惧を改善し、軽減し、第 14 軍の士気と自信は高水準に達した<sup>37</sup>。

英国司令部は 1944 年夏までに連合軍空軍の展開と人員、装備の数的増大を支えに、前述した重要な戦術の教訓を実戦に適用しながら、ものにしていった。

第 1 に日本軍の古典的な側面包囲により遮断された時、空軍の補給を受けながらどのように耐え、戦い、戦車隊により包囲網を攻撃して反撃する方法を学んだ。戦術的、技術的能力とは別に、これは包囲された人員の態度と自信が前年とは異なっていることを必要としており、効果を発揮するためには指揮官のリーダーシップの質が大きくものをいった。それを最初に達成したのは 1944 年 4 月、アラカンのガチェダウ峠の戦闘で日本の第 55 師団桜井支隊により包囲されたメサービーの第 7 インド師団であった。空軍による補給が準備されていたことは同師団が包囲された時に役立った。さらに同師団は砲兵隊を擁し、周辺を中型戦車で防備されていた<sup>38</sup>。メサービー自身はアフリカ砂漠でのドイツ軍との同じような戦闘で生き残った経験がありそれが活きたにちがいない。彼

---

the Imperial General Staff, Letter 16576/II/1/SD1, 15 February 1944.

<sup>36</sup> Hickey, *The Unforgettable Army*, p. 184.

<sup>37</sup> BL IOC L/WS/1/441, Liaison Letters from the Chief of the General Staff (India) to the Chief of the Imperial General Staff; BL IOC L/WS/1/939, Quarterly Reports of the Adjutant General (India) Committee on Morale; PRO WO 203/5203, Morale in South East Asia Command July 1944 to June 1945; PRO WO 203/4536, South East Asia Command Morale Reports June to November 1944; PRO WO 203/4538, Allied Land Forces South East Asia Morale Reports August to November 1944; PRO WO 193/452-453, Morale Committee Agenda, Minutes and Papers.

<sup>38</sup> Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume III*, chap. 10.

が部下に信頼感を与えた強力なリーダーであることは疑問の余地がない。彼の師団の働きで日本軍第 55 師団は補給を断たれ、英軍は反撃に成功した。英軍が戦術的に日本軍を制したのはこれが初めてだ。しかし、この戦闘で英軍が 5 対 1 の数量的優位性を保ちながら敗北したとすれば不名誉なこととなっただろう<sup>39</sup>。

「ウ」号作戦中、1944 年 4 月 6 日から 20 日の間に、コヒマ守備隊の 1500 名が日本軍第 31 師団により包囲された時の勝利は第 2 の戦例である。空輸、砲兵隊の援護と第 33 軍団による反撃がこれを可能にした。攻撃の間にコヒマで展開された歩兵部隊は英国ウエスト・ケント連隊の第 4 大隊だけであった。この国防義勇軍大隊は、ガチェダウ峠の戦闘後にアラカンから空輸され、猛将のジョン・ラバティ中佐の指揮下にあった。ラバティとリチャーズ大佐の間には軋轢があったが、コヒマ守備隊の全体指揮およびラバティのリーダーシップはもとより、連帯感、士気、彼の大隊の戦闘経験が勝利に大きく貢献した。守備隊の他の部隊は、以前の作戦行動で損害を受けた部隊の生き残り、管理部門の要員、病気があがりの兵士、補充兵などにより構成されていた。これらの兵士は彼等だけでは団結した戦力を形成できなかった。ウエスト・ケント隊は、日本軍が町を攻撃した時、折りよく到着した<sup>40</sup>。

この時、南部ではインパールの第 4 軍団全体が遮断されたが、戦闘を続け、4 月 6 日からコヒマからの第 33 軍団の進撃により輸送路が再開された 6 月 22 日までまったく空軍に頼った。英軍がこのように大規模に展開し、包囲態勢を確立したのは初めてであった。指揮に関しては、十分な航空機を確保したマウントバッテン提督の功績が大きいが、各師団長、思慮深い軍団長のスコーンズ中將も貢献した。これらの防御の成功で英国兵、インド兵の士気が上がり、自信と戦闘精神をもって攻撃する構えができた。

第 2 に、英軍は浸透して敵を側面包囲し、補給線を断つ日本軍の攻撃戦術を用いる発想にたどりつき、不利な条件下にもかかわらず反撃にでた。1944 年までにチンデットの指導の下にジャングルでの戦闘と空輸が大幅に改善され、この戦術が英軍に定着し、訓練師団と野戦軍で教えられるようになった<sup>41</sup>。コヒマ戦闘の最終段階でフォースフォードのグルカ兵が行なった浸透が効果を発揮した<sup>42</sup>。この間、インパール平野では、側面攻撃のような戦術は双方が用いるようになっていた。英第 48 師団がビシェンプールでこの平野に接近するため日本の第 33 師団の後方のティディム道路を遮断したのはその一例である。この戦闘は 5 日間続き、日本の第 33 師団に多大の損害を与えた。しかし、日本

<sup>39</sup> 日本の第 55 師団に対し、英軍は第 5、7、26、36、そして第 81 師団の 5 個師団を展開した。また、この時期には連合軍は制空権でも日本軍を圧倒した。

<sup>40</sup> Swinson, *The Battle Of Kohima*; C E Lucas Phillips, *Springboard To Victory* (Heinemann, 1966).

<sup>41</sup> BL IOC L/WS/1/777, Command Study Period – The Burma Campaign – November 1944, Lecture by Brigadier I M Stewart. NAM, Army in India Training Memorandum No. 25, July 1944.

<sup>42</sup> Swinson, *The Battle Of Kohima*, pp. 138-139.

軍は撤退せず、諸兵種連合戦術を組み合わせた総合戦術を用いて圧倒的兵力を動員する第3の教訓が必要となってきた<sup>43</sup>。

1942～43年の第1次アラカン戦争では機甲部隊の助言にもかかわらず、英国司令部は教訓を無視して、歩兵と協議せずに戦車を強引に使用し損失を招いた。1944年までにニューギニアでの豪州の経験に照らし、スリム（第14軍を指揮していた）はその適切な使用を決意し、諸兵種連合戦術の訓練を行なった。インパールでは第23インド師団が戦車の訓練を実施し、第17および第20師団はマニプール高地に向けて展開した。その役割は、インパールに備え機動予備軍となることだった。1944年の戦闘ではガチェダウ峠の戦闘中、第7師団の守備範囲には戦車2個中隊が展開して、日本軍を近距離直接射撃し、歩兵の反撃を支援した<sup>44</sup>。同時に、空軍との調整が改善され、第11混成軍の将校はアンカラ訪問後次のように報告した<sup>45</sup>。

火力支援の技法は明確にしかも注意深く研究され、諸兵種連合した支援の実戦への適用が円滑、効果的に行なわれた。

後にコヒマ増援は当初の日本軍陣地に対する側面包囲を数度試みて失敗した後、消耗戦に転じた。しかし、最終的に歩兵が多く日本軍陣地を占領できたのは砲兵、空軍、戦車の組み合わせによるものであった<sup>46</sup>。第2師団はコヒマ制圧に手間取ったが、地上部隊の制約からみて長時間を要したのも無理はなかった。第2師団は水陸両用作戦用の装備と訓練が施されていた。同師団は1940年にフランス戦線に参加し、アッサムで初めて日本軍と遭遇した。フォースフォードの浸透作戦は戦闘の最終段階で奏効し、日本軍が進攻したコヒマ丘陵での掃討に寄与した。英軍は火力で勝ったが死傷者が多く、雨期の戦闘条件が厳しかった。長期にわたる戦闘は師団の指揮と兵の士気により支えられた。しかし、少なくとも一人の英軍大隊長が部下の休養不足の苦情がもとで交代した。空からのインパールへの補給が重要となっていたにもかかわらず、第33軍団を指揮するストップフォード中將はスリムから救援の要請を受けた。戦闘が激化するにつれ、ストップフォードと第2師団を指揮するグローバー少将の関係が緊迫化した。第7師団が到着し、ス

---

<sup>43</sup> Lyall Grant, *Burma – The Turning Point*, chap. 10; IWM, Japanese AL Box 21-5240, The British Road Block on the Tiddim Road; IWM, Japanese AL Box 18-5202, Burma Operations Record – 15<sup>th</sup> Army Operations in the Imphal Area – Japanese Monograph 134, p. 65.

<sup>44</sup> John Leyn, *Tell Them Of Us* (Lejins, 2000), pp. 192-193; Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume III*, pp. 133-152.

<sup>45</sup> PRO WO 203/1897, Infantry/Operations Reports; IWM Japanese AL Box 24-5295, Report of 55<sup>th</sup> Division Operations in Arakan February 1944 も参照。この文書は英軍の諸兵種連合戦術の効果にも言及している。

<sup>46</sup> PRO WO 172/4247, 2<sup>nd</sup> British Division G Branch War Diary, Operation Instruction No. 11 – Clearance of Kohima Ridge; Woodburn Kirby, *The War Against Japan Volume III*, chaps. 13, 14; Prasad, *Reconquest Of Burma Volume I*, chap. 15; Swinson, *The Battle Of Kohima*, chaps. 8-11.

トップフォードが全軍を指揮したが、グローバーの監督には手を抜いた<sup>47</sup>。グローバーは更迭され、これを知った第2師団将兵の間に不満が募った。

英軍指揮官がジャングルでの浸透と諸兵種連合の戦術を習得したことは、1944年7月から第5インド師団がインパールからティディム道路に進撃した際に現れた<sup>48</sup>。スリムは次のように記載している<sup>49</sup>。

多くの日本軍陣地は地の利を得ており、堅固に守備されていたが、英軍は逐次敵を撃退した。その方法は、敵陣を確認次第、砲撃、爆撃し、その間に高地から敵の背後を襲って側面を包囲し、これと調整しながら戦車で正面から攻撃した。

この前進は雨期にも行なわれたが、道路輸送は物理的理由から断念された。チン高地に空港を建設できなかったため、補給はもっぱら空中投下に頼り負傷者は師団で担っていかざるを得なかった。多くの看護婦が負傷者の手当てを志願した。日本軍とウイングートのチンディツが開発したジャングル戦術は第14軍により諸兵種連合戦術とともに使用された。英軍の戦術と指揮は、1942年の退却以来、長足の進歩を遂げた。

1944年初期に英軍の戦術には指令コントロールの実行と解釈に不備があることが判明した。これはドイツ軍が開発したもので、スリムも次第に多く使用するようになった。あらゆる可能性をカバーするため繰り返して詳細な命令を与える代わりに、意図を明確に説明し、一定の範囲内でその意図を支援する任務を部下に与えるのが指令コントロールである。この任務をどのように達成するかは部下に委ねられる。指揮の各レベルで戦術と戦闘に関する明確な理解を要求し、詳細な命令を最小限に止める。スリムがこの指令形式を提唱したのは配下の部隊が分散していたためだが、第2次大戦当時の英軍司令官には不慣れな手法であった<sup>50</sup>。このためか2つのケースで失敗がみられた。日本軍の「ウ」号作戦の間に（日本の）第15軍と戦うため第4軍団の師団をインパール平野に後退させるタイミングの決定はその一つだった。スリムは決定を軍団長のスクーンズに委ねた。彼は師団長の助言に頼ったが、師団長達は陣地の固守を望み、総合的判断に欠ける嫌いがあった。その結果、決定が遅れ、第17師団は敵と接触しながら、ティディムからの長路撤退を余儀なくされた<sup>51</sup>。

同じ頃、ディマプールでは、第33軍団を指揮するストップフォードと地域指揮官の

<sup>47</sup> Swinson, *The Battle Of Kohima*, pp. 170-171.

<sup>48</sup> Prasad, *Reconquest Of Burma Volume I*, c. 4.

<sup>49</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, p. 357.

<sup>50</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 541-542; David French, *Raising Churchill's Army* (Oxford, 2000), pp. 22-24.

<sup>51</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 294-295.

ランキング少将がディマプールとコヒマの防衛を優先するスリムの意図を誤解した。これが増援任務に混乱を生じ、日本軍第31師団が1944年4月6日に到着した時にコヒマは陥落寸前となった<sup>52</sup>。スリムはこの失策の責任を認めたが、状況を明確に把握しなかった部下にも責任があった。

指令コントロールは、1945年初期のイラワジ河の戦闘が行われるまでに軍団、師団の指揮官により明確に理解されるようになった。この河を渡り、マンダレーとメイクティラを占領したのはその成果であった。機甲部隊と空軍の支援でイラワジ河を渡河する敵を側面包囲しメイクティラを占領した第4軍団への第14軍の作戦指令がそれであった。この作戦は部下により理解され、計画どおり実行された<sup>53</sup>。

戦術レベルの英軍指揮官等は戦闘の後期までに任務に練達した。細部の至らぬところは戦闘力と機動力で補われた。優越した空軍の援護下に機甲師団と砲撃を駆使できるビルマ中部平野の乾燥した環境にも慣れてきた。このため、重要拠点で日本軍を側面包囲し、補給路を遮断し、兵力を集中できるようになった。この段階での戦術指揮の技法はジャングル戦での巧妙さよりも、複雑な組織の調整、敏速な行動により特徴づけられた。しかし、日本軍の頑強な決意と練達、軍紀は変らなかった。従って機動力と行動範囲の拡大にもかかわらず、歩兵と機甲部隊は日本軍陣地の攻略に手間取ったため、簡明かつ一貫したリーダーシップが必要であった。

戦闘が終わりに近づくにつれ、疲労と家族や帰国後の心配から士気に乱れが生じた。多くの兵士が海外任務終了を間近にしていた。その期間は5年から4年に短縮され、さらに3年4ヵ月となった。その結果、第14軍では予想外に多くの人員が去って行く事態となった。その補充者は未経験で、英国部隊の能率が低下した。人事についての兵士の苦情が増え、この時期の士気記録には将校の兵士への気使いが認められる。しかし兵士の自信と戦闘心は勝利に近いとの認識からゆるがなかった<sup>54</sup>。

要約すれば、ビルマ戦線当初における英軍の戦術指揮は指揮の戦略・作戦レベルの準備不足で不十分であった。その結果、戦術指揮官は不適切な人員の訓練に努力したが、日本軍に圧倒された。インド軍のリーダーシップは「クイットインディア（インドから去れ）」運動中に兵士の士気をよく保ったが、1942～43年冬のアラカンの戦闘は醜態であった。その責任はあらゆるレベルでの英国人指揮官にある。戦術能力は、指揮系統の人員不足と上からの干渉にもかかわらず、兵力以上に機能する。第1次ビルマ作戦の戦術教訓を無視し、無能な戦闘を行なった責任は免れ難い。この頃、英軍の能率と士気が

---

<sup>52</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 309-310.

<sup>53</sup> PRO WO 203/1239, XIV Army Planning Instruction No. 6, 17 January 1945.

<sup>54</sup> Slim, *Defeat Into Victory*, pp. 521-522、Morale reports in PRO WO 203/5203, *Morale in South East Asia Command July 1944 to June 1945* も参照。

低かったのはアラカンの敗北のほか、徴兵の困難、新任士官および兵の質が劣っていたためである。1943 年秋以降、人員と指揮の質が改善され、戦術能力、一般管理そして士気が急速に向上した。その発端となったのは東南アジア司令部と第 14 軍の編成と、インドからの補充と訓練であり、その結果は指揮系統に行き渡った。これにより第 14 軍は 1944 年にインドへの進攻を撃退し、一路ラングーンに前進できた。